人から必要とされることこそ生きがい。
必要とされるように
自分の人生方向を常に方向修正しています。

AMDA理事長
菅波　茂

すがなみ・しげる
1946年広島県神辺町生まれ。76年岡山大学医学部大学院修了。81年菅波内科医院開業。84年国際医療ボランティアAMDA設立（海外30支部を持ち登録医師は約900人）。95年に国連NGOに認定される。2001年岡山県哲多町に設立された公設国際貢献大学校校長に就任。三木記念賞「国際親善部門」受賞。医療法人アスカ会理事長。趣味は尺八。

人生を方向づけたアジア12ヶ国放浪の旅

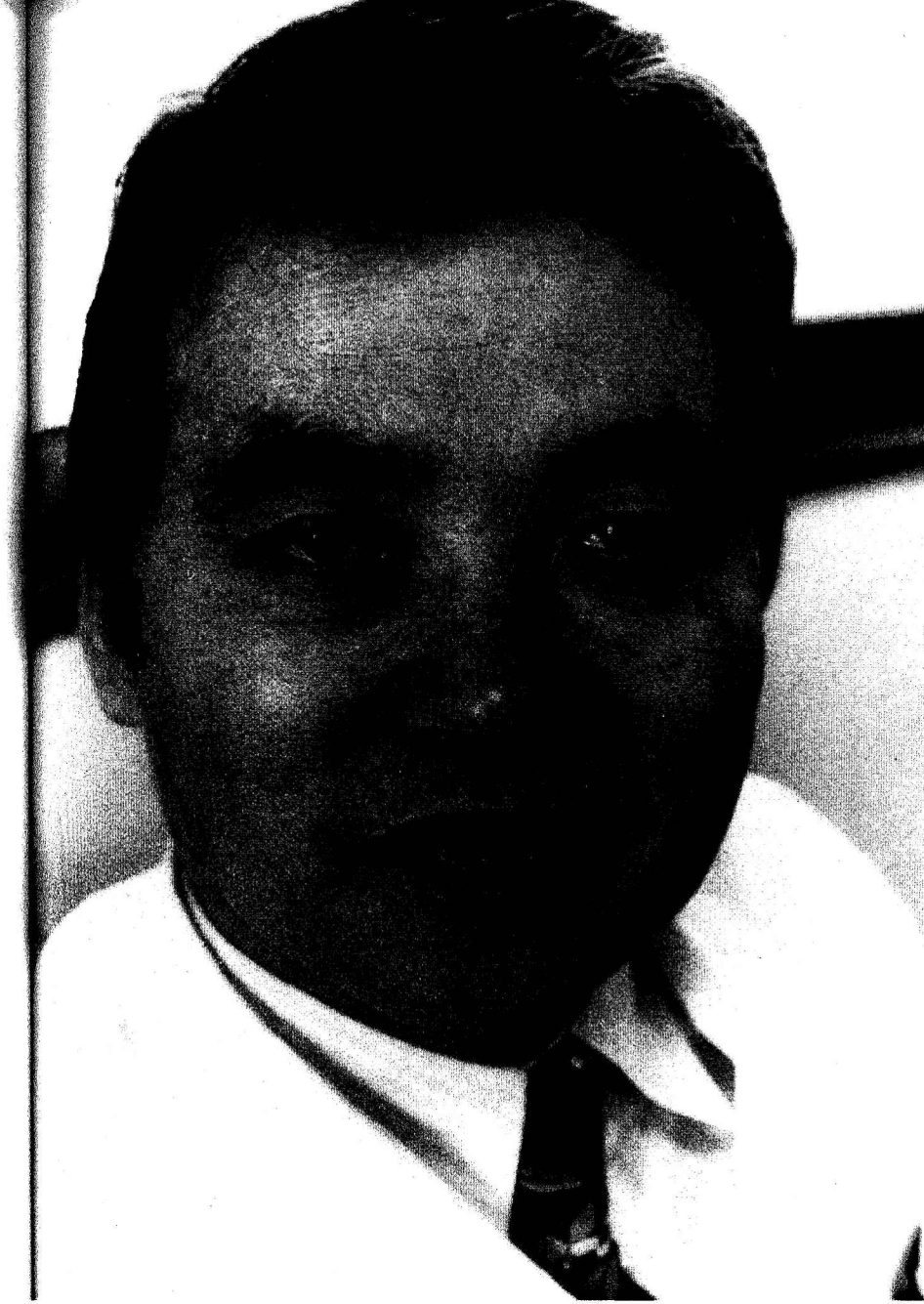
―菅波先生、ＡＭＤＡをつくる原点になったきっかけを教えていただけますか。

１９６９年、大学紛争が全国的に吹き荒れたときですね、ちょうど岡大医学部もストライキになって、そのときに10ヶ月間、アジアを回っていろんな経験をしました。アジアの活気、特に市場などに見られる、日本にないものを経験して、それ以後アジアと本格的にかかわりたいと思ったのが始まりです。やっぱり、人間はですね、最初に接した異文化が、焼き付くといいますよね。私は、そのときアジア12カ国、回りましたから、それが自分の原体験として、いろんな活動をするときにいつも出てくるということじゃないかなと思うんです。

―アジア放浪の旅の中で、アジアにかかわる医療をしていきたいと決意は固めたんですか？

自分があちこちで病気をしまして、例えばミャンマーでは、マンダレーというところでお腹が痛くなって、怪しげなピンク色の注射をしてもらって治ったとかですね（笑）。イランでは、当時パーレビー国王のときで非常に勢いがよくて、医療は無料だったんですよね。テヘランの市民病院で無料の治療を受けて、イランの状況がわかったとか。香港でやっぱりお腹が痛くなって、システムはできているんですけれども、実際は3時間待たされたとかですね。各国でいろんな医療体験をしたというのが、ひとつの大きな促進力になっていると思います。

―そのときには、アジアにかかわる医療をしていきたいという、強い決心ではなかったということですか。



なかったんですよね。いちばんは、70年にタイへチームをつくって行ったときでしょう。クワイ河という有名な所がありますけれども、尺八と琴、三味線の邦楽の演奏旅行を企てたんです。倉敷の永瀬隆さんがタイで国際協力の活動をしていることを新聞で見て、タイで演奏する場所を相談に行ったら、「医者とか医学生もおるんだったらですね、タイとビルマの国境地帯の農場で健康診断をやってくれないか」という、それがそもそものきっかけですよね。

—そのときに、健康診断や、医療をしたときの経験は、いかがでしたか？

ほとんどの人が回虫とか蟯虫とか十二指虫とか、もう二重三重に寄生虫にかかっている、とんでもない状況だ、というのがわかったわけです。日本では信じられないような保健医療状況があるというのが、よくよくわかりましたね。

—再びタイを訪れて、やっぱりアジアにかかわっていきたい！　という強い思いというのが、わき上がってきたのでしょうか？

僕たちが帰ったあと、タイの農場主が保健委員会をつくって、診療所を作ったからぜひ来年も来てくれと要望が入ったんですね。それで、また翌年も行くことにしたわけです。ところが、こういう活動というのは人から寄付をもらわにゃいけんのですね。寄付をくださる方が、今後はどういう方針ですか、ということを必ず聞くわけですね。もう、当然来年もやります、という手形を先に切るわけです。行って帰るとですね、また来年に向けて準備しなきゃいけない。これがず～っと繰り返してきて、今日に至ったというのがあるんです。

—では、もっともっとさかのぼって、そもそも医学を目指したというのは何かきっかけがあったんですか。

最初は、祖父が裁判官で親父も法学部卒業でしたから、法曹関係の世界に行こうということで、高3まではその準備をしてたんですよね。3年生の夏のときですかね、親父と雑談している中で、「シュバイツァーもええんじゃないか」とかいう話がちょろっと出まして。ほんなら、医学部を受けてみようかというんで医学部は岡大と法学部は私立のを受けて、授業料の安いほうがいいというんで岡山に来たと。

常に徒党のリーダー格だった少年時代

—少年時代、どんな少年だったか教えて下さい。

小学校のとき、後ろに山がありまして、みんなと遊びに行ったときに、だいたい2つのグループに分かれると、ひとつのグループが私がリーダーというかたちで。戦争ごっことかね、ようやってましたよね。

—じゃ、やんちゃ坊主だったんですか、結構。

ええ、そういう意味じゃね、昔から、徒党を成して物事をなす、というのはようやってましたよね（笑）。

—常にリーダーシップをとるタイプだったんでしょうか。

一方のね（笑）。だから小学校のときの、そういう経験が今、役に立っとるかもわからんですよ。

—さて、実際にAMDAという組織をつくるまでのプロセスをお聞かせ下さい。

70年のタイへの医療支援以来、毎年、海外へチームを出して、そのチームの活動に応じて規模が広がって

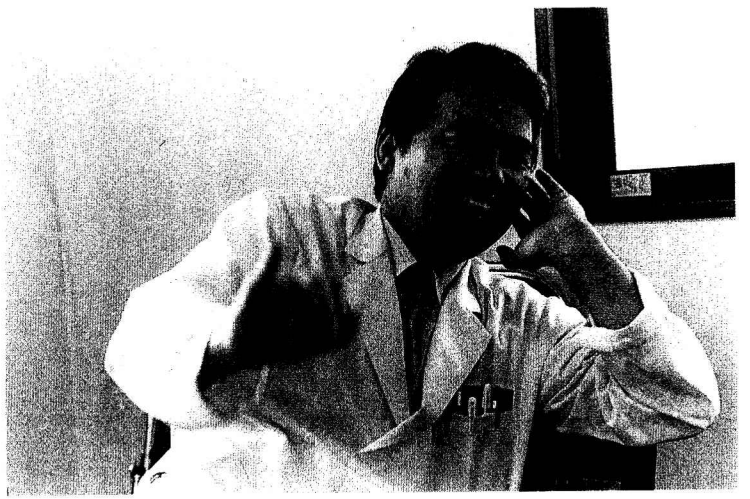
西日本レベルの組織ができた頃、１９７８年に、タイのポルポトの難民が出たということで、日ごろアジアにかかわっている私たちとしては何かお手伝いができないかと、私と2人の医学生の調査チームで行ったんですけど、結局何もできなかったのです。初めて、人道援助の世界と知識がなくては何もできない、という難しさを知ったわけですよね。そこで、アジアの将来医者になる卵の医師、医学生が人間関係をつくって、いざというときにはいいプロジェクトをやろうじゃないか、というのがきっかけで、84年にＡＭＤＡができたんです。

―今やもう、世界各国に支部がある大組織になったわけなんですけれども、さまざまな国に支部を作るというのは、どんなふうに手掛けていかれたんですか？

やっぱり、いろんな人間が出てくるんですよね。出てくる人出てくる人に、いろんな話をして、支部を作ってくれないか、というのを持ちかけて、それぞれの人が能力を、結果的には持ったということですよね。人間関係が、そういうふうに発展したと考えていいんじゃないかと思うんですよね。

―その人間関係というのは、意図して支部を作るためにというものではなくて、ごく自然に発生してきたと。

そうですね。たとえばインドネシア支部の場合ですが、広島大学大学院の麻酔科でやっていた人をある人から紹介してもらいました。大阪に行く途中、岡山駅で10分ぐらい話をしてお願いしたんですよね。今ではインドネシアのどこで何が起こっても、インドネシアと私たち日本が一緒にプログラムをやれるということができるようになりました。ボリビアの人も、ある人の紹介で会いました。今、中南米のどこで災害が起き



ても、その人を中心に救援活動がやれるというんです。結局、出会った人がその後、伸びているわけです。それで今、世界中だいたいどこでも仕事ができるというようになってきたわけですよね。だから、何かのご縁で結びついた人たちが、その後、実力を出してきて、いいプログラムが世界中どこでもできるという結果になったわけですよね。

AMDAの原点はタイの農場にあり

—今や日本を代表するNGOになり、国連の認定NGOになった。こういう大組織になるという予感はあったんですか？　それとも将来的にはありたいというふうには描いていらっしゃいました？

私たちが70年からやってきているそのときの気持ちと、組織が大きくなって客観的に他の人がくださる評価とのギャップがあるんですよね。それが問題といえば問題だし、逆にいうと、その原点から離れたくないというのがあるんですよね。このギャップがどうなっていくかですよね。

—変わらない原点というのは何ですか、先生にとって。

やっぱり、お役に立ってうれしいという（笑）。医者と芸者は声がかかるうちが華というか（笑）。これはもう人間としてですね、他人の役に立ってうれしいという、どなたでも持っておられる気持ちを、ただ補助線を伸ばしているだけの話ですよね。その原点は、やっぱり、タイの農場の中で委員会と診療所を作って、また来てくれと言われたことが、非常に新鮮でうれしかったこと。これが、ただ拡大していっているだけというような気がしますよね。

—でも、実際に支援をするというのは、国と国との違いのいろんな勘違いがあったり、意思の疎通がうまくいかなかったりと、トラブルも山のようにあったと思うんですけれども、もうやめようかと思ったことはないですか？

それはないですよね。私たちがいちばん気をつけているのは、人に喜んでいろんなモノを持ってきてもらうのはお金だけでなくて、相手の心まで盗むからいけないと。だから、私たちもメンバーに、この三番目の盗みにならないように、「いつも倫理道徳的な面から検討しながらやらないとこわいことになるよ」という話はしているんですけれども。

—これからのAMDA、どういう存在であり続けたいと思っていますか？

ひとつは、アジア、アフリカ、中南米を代表する国連NGOとして、いろんな政策を提言していきたい。発展途上国の意見を集約して、国連に反映させる役割をやりたいと思っています。もうひとつは、AMDAを育ててくださった岡山を、世界が必要とする都市にするために、AMDAが果たせる役割があったら、いろんなところでお手伝いさせてもらいたいと。この二つが自分なりに、AMDAをどうもっていったらいいか、一応考えていることなんですけども。

—菅波先生が提唱している「西のジュネーブ、東の岡山」構想、AMDAの存在があることで、岡山がどんどん元気になるようにというのは、すごく強く思っていらっしゃいますよね。

もともと岡山の財産は何かということを見たとき、阪神大震災のときの県民あげての救援活動、これは弱

者に対する共鳴という精神ですよね。その精神を、世界に向かって発信するときに、ＡＭＤＡがお役に立てるんじゃないかと。人道援助の世界都市といえば、ジュネーブ、だからジュネーブと岡山が結んで、いい人道援助の世界が展開できますよと。でも基本は岡山の、弱者に対する共鳴という精神風土だと思いますね。

人から必要とされることこそ生きがい

―ご自分の本業だけでも大変です。それから、ＡＭＤＡもリーダーとして率いることも大変。たくさんの夢を実現しているというのは、何に突き動かされるんですか。

人から必要とされているというのが、一種の生きがいになっていますから、必要とされるように、自分の人生方向とかやり方も常に修正しながらやっています。時代が変われば必要のされ方も違いますけれども、現在のところはＡＭＤＡの生き方が、いろんな人から必要とされる存在である、というのがひとつの目標でやっています。

―世界中の人たちと共に組織をつくって、そのリーダーシップをとるというのは、大変なことだと思うんですけれども、人と人とのコミュニケーション、ネットワークを組む上で、モットーにしてることってありますか。

ＡＭＤＡというのは、今30支部がありますけれど、多分、近い将来に50までいくと思うんですね。そうすると、多民族、多宗教、多文化ということで、多様性の共存ということになるとここがヘッドクォーターになりますね。そうすると、常に私たちが心がけにゃいけないのは「公平さ」というものを、どういうふうに保っていくかということなんです。「公平さ」の反対が「差別」ということになるんですよね。「公平さの方程式」というのを作りまして、それが一応みんなには認知されているんですけれども、意欲があって、能力があって、チャンスがあれば、人は結果が出せる、と。これが「公平さ」なんですね。ところが、「差別」というのは、意欲があって、能力があっても、チャンスが与えられない。これが「差別」だと定義しています。能力はわからないけども、意欲がある人にはちゃんとチャンスを出していくと。その結果によってまた判断する。意欲はなくても能力がある人にはどうするか。この人には絶対チャンスは出さない、というのが私たちのやり方なんです。これがＡＭＤＡがやっている「公平さ」なんですね。私たちも、この多様性の共存の中でいちばん重要なキーワードは「公平さ」を本当にやっている組織かどうか、というのが問われると思うんですね。それをいちばん、気を付けながら、やっています。

人類普遍の法則は夫婦生活から学んだ

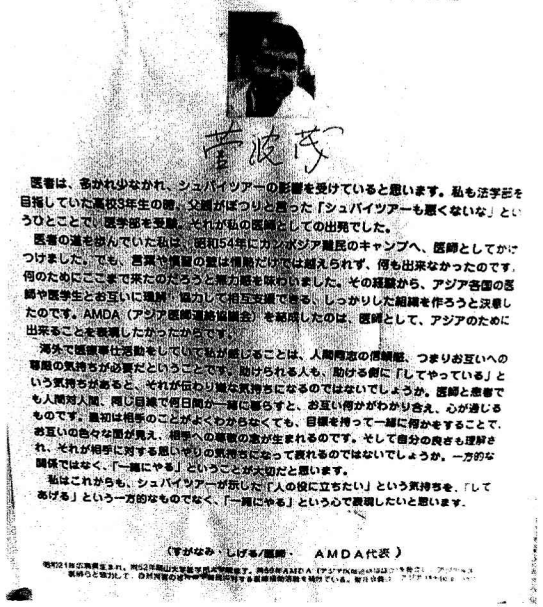
―先生の活動の原動力というのを伺ってきたんですけれども、私は、本当に、人間が大好きな方なんだなと思っているんですが、そのあたりはいかがでしょう。

いちばん大好きなのは、うちの奥さんです。はっきりしてます。やっぱり、夫婦生活の間で発見した事実は、人類普遍の法則というのが多いんですよね。

―例えば。

やっぱり、男と女は違うということ。

―じゃ、男性と女性は、結婚する結婚しないはおのおのの選択ですけれども、共に一対になって生きることは、ふさわしいと思っていらっしゃいます？



してあげるのではなく、一緒にやること

菅波茂

医者は、名かれ少なかれ、シュバイツアーの影響を受けていると思います。私も法学部を目指していた高校3年生の時、父親がぽつりと言った「シュバイツアーも悪くないな」というひとことで、医学部を受験。それが私の医師としての出発でした。

医者の道を歩んでいた私は、昭和54年にカンボジア難民のキャンプへ、医師としてかけつけました。でも、善意や情熱の量は情熱だけでは越えられず、何も出来なかったのです。何のためにここまで来たのだろうと無力感を味わいました。その経験から、アジア各国の医師や医学生とお互いに理解、協力して相互交流できる、しっかりした組織を作ろうと決意したのです。AMDA（アジア医師連絡協議会）を結成したのは、医師として、アジアのために出来ることを模索したかったからです。

海外で医療事仕活動をしていて私が感じることは、人間尊厳の信頼感、つまりお互いへの尊厳の気持ちが必要だということです。助けられる人も、助ける側に「してやっている」という気持ちがあると、それが伝わり嫌な気持ちになるのではないでしょうか。医師と患者でも人間対人間、同じ目線で何日間か一緒に暮らすと、お互い得かがわかり合え、心が通じるものです。最初は相手のことがよくわからなくても、目標を持って一緒に得かをすることで、お互いの色々な面が見え、相手への尊敬の念が生まれるのです。そして自分の良さも理解され、それが相手に対する思いやりの気持ちになって返れるのではないでしょうか。一方的な関係ではなく、「一緒にやる」ということが大切だと思います。

私はこれからも、シュバイツアーが示した「人の役に立ちたい」という気持ちを、「してあげる」という一方的なものでなく、「一緒にやる」という心で表現したいと思います。

（すがなみ・しげる／医師・　AMDA代表）

やっぱり、お互いの住み分けというのは、ちゃんとアイデンティティーがありますから、それを理解した上で助け合っていくというのが原点だと思うんですね。やはり、双方があって古今東西ロマンが生まれ、詩が生まれ、いろんなことが出てきているんですね。男女というだけで、かくも多様な精神世界が展開していると思うと、やっぱり驚きですよね。だから、もっと夫婦生活を大切にすれば、非常に豊かな生活が保障されますよ、と思うんですけれどね。AMDAは、その産物ですけれど（笑）。

―**菅波流、夫婦円満の原理、原則はなんでしょうか（笑）。**

ひとつは、前向きに仕事を共有するということです。それから苦労を共にする方がいい、と。苦労がなくなったときは、あんまりいいことにならないんじゃないかなという感じがしますね。だから、「子は鎹（かすがい）」といいますけれども、子どもが独立したら、何を今度は共有するか。楽しみを共有するんだったら、苦労を共有したほうが人間関係は深まる、と。苦労は智恵（ちえ）の泉という感じですよね。

真のボランティアとはパートナーシップであること

―さて、AMDAの原点はボランティア精神、たくさんのボランティアに支えられているAMDAですが、ボランティアを、菅波先生はどう捉（とら）えてらっしゃいますか？

僕たちは、AMDAの人道援助三原則というものを持っています。第一は、だれでも他人の役に立ちたい気持ちがあるということです。二つ目は、この気持ちの前には、民族とか宗教とか文化は関係ありません。それから、三番目が大切なんですけれども、援助を受ける側にもプライドがあるということなんですね。だ

れでも社会から必要とされたい、認められたいという気持ちがあるということなんです。一方的に「ありがとう」と言わされていると、その人のプライドが破壊されてきます。だから、「ありがとう」と言ってもらう喜びのためだけにやっちゃうと、相手は、どうなっているのか、ということを考えなきゃいけないですよね。その視点をなくしたときに、ボランティア活動というのは、いわゆるスポンサーシップの感じになります。そうではなくて、一緒に苦労を共にするという、パートナーシップの関係の方が、お互いに、尊敬と信頼という人間関係が出てくるチャンスがありますよ、ということですね。

—ボランティアをする人の秘訣、というのはなんでしょうか。

自分が非常にハッピーだと思っている人が、他人に自分の幸せをお裾分けするのはボランティア。自分が幸せになるために、他人に対していいことをしてあげる、これは修行ですよね。だから、自分は、同じ他人に対して役に立っているんだけれども、自分の幸せをお裾分けしているのか、それとも自分がより幸せな状況になるために、他人に対していいことをしているのか、というのは見分ける必要がありますね。それによってボランティア活動なのか、自分にとっての修行なのかということを見ていった方が、間違いがないんじゃないかなと思いますよね。

—たくさんの人とかかわって、いろんなプロジェクトをしていく中で、人間への洞察力って、菅波先生の中でも問われてくると思うんですけれども。

いちばんわかったのは、弱者に対してその人がどうふるまっていくか。3点ありますね。まず強い人と弱い人に対して態度が変わる。これはやっぱり危険ですよね。それからふたつ目は、嫌なことを弱者に押しつける。三番目は、いろんな責任を、失敗したときに弱者に押しつける。これが人を見る秘訣なんですけれども、弱者の人にそのモニタリングを頼むとわかりやすいですね。この人は、弱者の私に対しても全然態度が変わらない、私に嫌なことを押しつけてこない、いろんな失敗を私に持ってこないと弱者が言った人は、いい人ですね。私たちのように、いろんな意味で影響力を持っているところで、弱者に対してどうしているかというところは、弱者の人に教えてもらえれば、いちばんわかりますね。

どんな人に会ってもありがたい

—先生ご自身の、これからのビジョンは？

これからですか…「菅波さんあんたやっていることが、いろいろうまくいってるけれども、気を付けなさいよ。もし前世、現代、未来があるとしたら、前の世の中でいろいろ貯金してたことをね、今、引き出して取り崩していってるんですよ。だから、引き出した分以上に、やっぱり、ちゃんと積んどきなさいよ」と言ってくれる方がおられまして、それまでは「なんて自分は運が強い男なんだろうか」と、やることやることが割とまあまあうまくいく。そういう説明を受けると、なるほどな、やっぱり、どんどん貯金を取り崩していってるのか、という話になるとですね、一種の怖さを感じますよね。

—身近な人の言葉を真剣に受け止めて、アドバイスを聞き入れながらという思いを、今、ひときわ強くしていらっしゃいます？

だから、我が身を、日に3回省みるという、三省という言葉が論語にありますけれども、3回どころか、

人に会うたびに、その人が発する言葉が、自分とどういうかかわりを持っているのか、という感じになりますよね。だから、どんな人に会ってもありがたい、という感じになりますよね（笑）。

発足当時は事務局職員はパートさん1人だったAMDAも、今や25人の職員が携わる日本を代表するNGOへと成長しました。AMDAのスタッフが語るエピソードからは、世界からNGOの教祖としてあがめられるイメージからかけ離れた？　菅波先生の素顔が見えてきます。

AMDAの代表者として、病院の経営者として多忙を極めているせいなのか？　秘書がいないためなのか？　菅波先生は忘れ物の名人らしい。携帯電話を紛失したり、重要書類を1階から2階へ移動中になくしてしまう…。『チケット類は同行者に渡すこと』『スケジュールは直前まで何度も念押しをして確認する』〝菅波対応マニュアル〟は、スタッフ自らが経験を重ねて身に着けていくらしい。

93年春、ある日の昼下がり、とあるレストランで私は、将来の日本の国際貢献について熱く語る瞳（ひとみ）に見とれていました。

「〝西のジュネーブ、東の岡山〟を目指す国際貢献トピアおかやま構想を推進する会が主宰する、第一回岡山国際貢献NGOサミットを開催するにあたり、これからの日本は岡山と広島、そして沖縄の3つの地がトライアングルとして結び合い国際協力のリーダーとなる使命があるのです。沖縄で人脈のある田淵さんに沖縄サテライト会議のコーディネーターを務めていただきたいんです」。考える間もなく、二つ返事で

約束する私がそこにいました。シンポジウムは「地域からの国際協力」をテーマに開催し、成功のうちに幕を閉じました。私にとっては初めての本格的ボランティア活動。ボランティアは仕事と同じ厳しい責任を担うことを実感しました。しかし、初めての取り組みがゼロからひとつの形に成し遂げられたことは（有形無形の）かけがえのない財産となっています。思わぬ副産物として、サテライト会議をきっかけにAMDA沖縄支部も誕生しました。

準備期間中には、疲れ果ててAMDAを後にする私を見えなくなるまで見送ってくださる菅波先生の姿に、〝やっぱり頑張ろう〟と決意を新たにしたものでした。後に判明したのですが、人はこれを〝菅波マジック〟と呼ぶそうです。私が気付いたのは会議が終了してからのこと。すべて後の祭りです。私はまんまと一度にしてマジックにかかり、いまだNGOにかかわり続けている次第です。夢を熱く語る少年のような瞳に〝この人の夢の実現をお手伝いすることは私の夢〟とばかり菅波マジックにかかる人は今も後を絶ちません。

「自分にとって大切なお客様は、自分自身でお茶を入れるのが当たり前」。取材当日、診療を終えたばかりの菅波先生は、満面の笑顔で迎えてくださりおいしい緑茶を入れてもてなしてくれました。いつもは冷静なはずのカメラの濱井亜矢さんも滑稽（こっけい）なほどにはしゃいでいて、一度にして菅波マジックにかかってしまいました。嗚々（ああ）、またしても菅波マジック！　このマジックは今や岡山を本拠地として世界中に蔓延（まんえん）しているらしい。菅波マジックはある日突然、前ぶれもなくやってくるのです。